

高等学校英語教科書で扱われる異文化と学習者の異文化意識

—フランスの外国語教育から得られる示唆—¹

横関木蘭

1. はじめに

グローバル化が進む世界では、ある言語の文法と語彙だけを学んだ学習者は、その言語でコミュニケーションするための十分な能力を備えているとは言えないため、文法や語彙と同程度に文化的な知識が必要となる (East et al., 2022 ; Liddicoat, 2008)。そのためには、様々な文化現象の表層的側面のみを比較するのではなく、その深層的側面をも探求し、その文化における事物、考え方、価値観を明らかにし、国際社会の中で、異文化意識と理解、コミュニケーションを目指すことが欠かせない (栗原, 2006)。つまり、Hall (1976) が示した氷山モデルにおける、生活習慣や食事等の目に見える顕在文化だけでなく、価値観や思考等の目に見えない潜在文化も明示的に指導する必要があるということである。しかし、現在の日本の高等学校で使用されている英語教科書には、英語話者の多様性や学習者の異文化意識の発達段階は反映されておらず、日本に関する顕在文化を多く扱うに留まっている (大川, 2016 ; 深沢, 1980 ; 孫工&江利川, 2019)。Yokozeki (2023) が実施したアンケートによれば、高等学校英語学習者は、差別やジェンダーといった複雑な題材への興味も低く

1 本稿を執筆するにあたり、Andrew Reimann先生 (青山学院大学) 及び編集委員長の濱野耕一郎先生 (青山学院大学) に多くのご助言を賜りました。心より御礼申し上げます。また、近藤野里先生 (青山学院大学)、古賀健太郎先生 (青山学院大学) には、他専攻にも関わらずめ細やかなご指導を賜りました。先生方の寛大なお心遣いに厚く御礼申し上げます。最後に、研究協力校の先生方と生徒たち、特に、宮川善美先生、古木実生先生、蜂谷加奈先生、石野莉花先生にはあたたかいお力添えを賜りました。ここに記して心より御礼申し上げます。

ないため (Yokozeki, 2023)、現在の英語教科書が提示する異文化について再考する必要がある。そこで本稿では、異文化に関する題材を多く扱うフランスの英語教科書を参照し、Yokozeki (2023) が行ったアンケートに参加したインフォーマントの一部に対して行った半構造化インタビューの分析から、日本人高校生が持つ異文化意識について考察し、英語教育を通して潜在文化を学ぶことが発達段階として適切であるかどうかを検討する。

2. 先行研究

2.1. コミュニケーション能力と異文化間能力の変遷

言語教育におけるコミュニケーション能力の概念は、Hymes (1972) によって大きく進展した。Hymesは、従来のコミュニケーション能力に求められていた文法能力だけでなく、言語を適切に使える能力も必要であると主張し、「文法的に言えるか」「心的・環境的に言えるか」「文脈的に言えるか」「実際に言うかどうか」が必要であると述べた (Hymes, 1972)。その後、Canale & Swain (1980) と Canale (1983) によってコミュニケーション能力の概念が整理され、「文法能力」「社会言語学能力」「方略能力」「談話能力」で構成されているとされた。この後、Celce-Murcia, Dörnyei & Thurrel (1995) は、「社会言語学能力」を「社会文化的能力」と変更し、さらに「行動能力」を追加したコミュニケーション能力の必要性を訴えた (Murcia, Dörnyei & Thurrel, 1995)。これらの概念に異文化理解の観点を追加したのがByram (1997) である。

Byram (1997) は異文化間能力を、「自分と異なる国の人々、または自分と異なる文化の人々と自分自身の言葉でやりとりする能力」と定義している (Byram, 1997)。異文化間能力には、態度 (*savoir être*)、知識 (*savoirs*)、解釈と関係のスキル (*savoir comprendre*)、発見と相互作用のスキル (*savoir faire*)、批判的文化認識 (*savoir s'engager*) が含まれると主張した (Byram, 1997)。この異文化間能力モデル (ICCモデル) は世界の言語教育に影響を与え、ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) にも引き継がれている。

前述のように、言語教育における異文化間能力の育成が重要視されつつあるが、Byram (1997) に対する批判も存在する。Halliday (2011) は、言語と文化両方を扱う際に、国レベルに焦点を置いている点を批判している

(Halliday, 2011)。またBaker (2011, 2020) も同様に、言語学習における文化へのアプローチは、国レベルで別々の存在であるものとして扱われていると指摘している (Baker, 2011, 2020)。グローバルな文脈と英語使用者の多様性を考えると、英語に関わる文化が1つではないことは明らかである (Baker, 2011 ; Meierkord, 2002)。つまり人々は、一方ではある文化や1つの国に所属するかもしれないが、他方で多文化にも属しているということである (Baker, 2020 ; Halliday, 2011)。このような文脈を反映して、BakerはByramのICCモデルをより流動的に拡張させた異文化意識モデル (intercultural awareness : ICA) を提唱した。異文化意識モデルは以下のように、レベル 1～3の合計12項目で特徴づけられている。リンガフランカとしての英語使用者が、複雑な文脈において適切にコミュニケーションするための意識について、「基本的文化意識」「発展的文化意識」「異文化意識」の3段階で示している。

異文化意識モデル (Baker, 2011)

レベル1－基本的な文化意識

以下の意識：

1. 共有された一連の態度・信念・価値観としての文化意識
2. 意味解釈における文化と文脈が果たす役割についての意識
3. 自文化による態度・価値観・信念への意識と、それを明確に表現する能力
4. 他者の、文化によるその人の態度・価値観・信念への意識と、自文化による態度・価値観・信念とを比較する能力

レベル2－発展的文化意識

以下の意識：

5. 文化的規範の相対的性質についての意識
6. 異文化理解は暫定的なものであるという意識と、修正可能である状態
7. どのような文化的集団の中にも複数の意見や視点があるという意識
8. 文化的集団を含む、多くの社会的集団の一員としての個人という意識
9. 特定の文化間における共通基盤への意識と、特定の文化間における食い違いや誤解がある可能性への意識

レベル3－異文化意識

以下の意識：

10. 異文化間コミュニケーションにおいて、特定の文化と関連するものとしての、あるいは創発的で融合的なものとしての、文化に基づく参照枠・形式・コミュニケーション実践への意識
11. 異文化間コミュニケーションにおける最初のやりとりは、文化的な固定概念や一般化に基づく可能性があるという意識と、それを12の意識によって乗り越えていく能力
12. 異文化間コミュニケーションにおいて、上記のような異文化理解に基づき、社会文化的に根付いたコミュニケーション様式や参照枠との間で交渉し、仲介する能力への意識

(筆者訳)

この異文化意識モデルは、「態度・信念・価値観」を中心とした潜在文化について、レベル1は認識や比較ができる段階、レベル2では多角的で流動的な側面を意識する段階、レベル3はより実践的で異文化を仲介できる段階を示している。しかし、日本の英語教科書研究では、Baker (2011) の示すような学習者の異文化意識や発達段階に注目した研究は多くない。

2.2. 日本における教科書を対象とした異文化研究

学校教育において英語学習者の異文化意識を高めるためには、教科書で異文化をどのように扱うかも重要である。2018年告示の学習指導要領においても、「英語を使用している人々を中心とする世界の人々や日本人の日常生活，風俗習慣，物語，地理，歴史，伝統文化，自然科学などに関するものの中から，生徒の発達の段階や興味・関心に即して適切な題材を効果的に取り上げる」と記述されている (MEXT, 2018)。しかし、現在の英語教科書の多くは、未だに文法シラバスに基づいた内容のままである (甲斐, 2021；中井, 2016)。

異文化間能力育成の重要性に着目して、教科書に登場する異文化を分析した研究も多く存在する (e.g., 大川, 2016；深沢, 1980；孫工&江利川, 2019)。深沢 (1980) は、1979年発行の「英語Bリーダー」4種類を分析している。その結果、主に伝記、詩、文学の類に偏っており、題材が芸術、科学、哲学、思

想、感情、道徳といった方向に傾いていると指摘した。同時に、英語学習者の文化に対する興味を調査している。中学3年生から高校2年生（119名）を対象にアンケートを実施した結果、身のまわりの生活場面や英語社会のエピソードといった顕在文化の学習を求める傾向があると指摘している（深沢, 1980）。大川（2016）は、2014年度「コミュニケーション英語I」の採択率上位12冊を対象に、学習指導要領の例示を基準に文化的題材を調査した。その結果、物語（昔話、小説など）に関する題材が一番多く、その次に風俗習慣（食生活、生活習慣、年間行事、伝統的なもの）、地理・歴史、自然科学が続くことを示した。潜在文化については全体の約40%であることを指摘し、若者文化（アニメ、漫画など）や戦争に関する題材が少ないことを明らかにしている（大川, 2016）。孫工・江利川（2019）は、11冊の「英語表現I」の練習問題を分析した。その結果、テキストが与える情報や問いに対し、情報の正誤性の分析や、考えや態度を想像させる設問は15%のみで、その中でも社会問題を題材とした設問は5%に過ぎず、そのほとんどを環境問題と他者性²が占めていた。つまり、階級、人権、ジェンダー、セクシャリティ、平和問題を題材とする設問が少なかったことを明らかにしている（孫工&江利川, 2019）。

以上のように、日本の英語教科書における異文化に関する記述は顕在文化の紹介が大部分を占めており、Baker（2011）が示したような「態度・信念・価値観」を扱う潜在文化を題材とすることは少ない。

2.3. フランスの学習指導要領と異文化をめぐる教科書研究

フランスの教育課程基準は、プログラム（Programme）と呼ばれる学習指導要領によって、授業時数、教科名とその指導内容といった大綱を定めており、学習期（cycle）ごとに教科別の到達目標等を規定している。フランスの外国語（地方語）教育の学習指導要領は、CEFR（2001）あるいはCEFR-CV（2020）の影響が強い。具体的には、言語能力に関する達成目標と同様に、文化的能力の重要性も学習期ごとに強調されている（Bulletin officiel, 2015）。これは

2 他者性について孫工・江利川（2019）は、Staszak（2009：43）を参考に「支配層（Us）と非支配層（Them）を分ける言説をもとに作り出された差異のこと」と定義し分類している。例えば、社会が作り出した社会的な男女差を表すジェンダー等が該当する。

CEFRにおける「言語知識と文化知識が切り離せない関係にある（CEFR-CV, 2020 : 123）」という考え方を反映している。特に高校においては、「外国語を学ぶ主な目的は、異文化を持つ話者間のコミュニケーションを確実にすることである（Bulletin officiel, 2019a : 7）」と明言されており、「文化教育と異文化間教育（Formation culturelle et interculturelle）」という項目で以下の8つの軸を示している。

「文化教育と異文化間教育」における8つの軸

高校1年生（**Seconde**）

1. 世代間を生きる（Vivre entre générations）
2. 職業の世界、仕事の世界（Les univers professionnels, le monde du travail）
3. 村、近隣、都市（Le village, le quartier, la ville）
4. 自己表現と他者との関係（Représentation de soi et rapport à autrui）
5. スポーツと社会（Sports et société）
6. 創造と芸術における関係性（La création et le rapport aux arts）
7. 地球を救う、可能な未来を考える（Sauver la planète, penser les futurs possibles）
8. 現在の中の過去（Le passé dans le présent）

（Bulletin officiel, 2019a : 8-10）

高校2年生と高校3年生（**Première et Terminale**）

1. アイデンティティとやりとり（identités et échanges）
2. プライベート空間と公共空間（Espace privé et espace public）
3. 芸術と権力（Art et pouvoir）
4. 市民権と仮想世界（Citoyenneté et mondes virtuels）
5. フィクションと現実（Fictions et réalités）
6. 科学の革新と責任（Innovations scientifiques et responsabilité）
7. 多様性と包括性（Diversité et inclusion）
8. 領土と記憶（Territoire et mémoire）

（Bulletin officiel, 2019b : 7-10）

年間を通して、教師は上記の8つの軸のうち、少なくとも6つを扱わなければならないと定められている (Bulletin officiel, 2019a : 7 ; Bulletin officiel, 2019b : 7)。以上をまとめると、フランスの学習指導要領には、CEFR-CV (2020) の目指す複言語・複文化主義に基づいた教育政策が展開されていると言える。

フランスの学習指導要領とCEFR-CV (2020) との関連に注目して、Yokozeki (2022) は、日本とフランスの高等学校英語教科書に登場する異文化について比較している。CEFRの社会文化的知識の分類に基づいた分析では、フランスの教科書では英語圏文化を中心に扱いながら、学年が上がるごとに「価値観, 信条, 態度」「対人関係」といった潜在文化が有意に多いのに対し、日本の教科書は学年が上がるごとに、身近な「日常に関する事柄」と「価値観, 信条, 態度」、「住環境」が有意に多いことを示している。つまり、フランスの教科書は日本の教科書より多様な題材を扱っており、特に差別やジェンダーなどの題材が該当する「対人関係」が多いことを指摘している (Yokozeki, 2022)。

総括すると、フランスの英語教科書は学習指導要領に則り、学習者の発達段階に応じて英語圏の潜在文化を扱う機会が増加する。それに対して日本の英語教科書では、高等学校3年間を通して日本に関する顕在文化が中心として扱われることが浮き彫りとなった。つまり、日本の英語教科書は、英語圏文化や学習者の興味、発達段階を考慮していると言い難いということである。実際に、学習者の異文化意識の段階や発達に応じた教科書の在り方について検討した研究も多くはない。例えばYokozeki (2023) では、都内の私立高等学校に通う英語学習者を対象にアンケート調査を実施しているが、学習者が持つ異文化意識の具体的動機や理由までは追及されていない。

そこで本研究では、Yokozeki (2023) のアンケート回答者の一部を対象に実施した半構造化インタビューの分析から、日本の高等学校英語学習者がどの段階の異文化意識を有しているのかについて調査する。さらに、高校生の異文化意識の発達段階に合わせてどのような題材を提供できるか、フランスの英語教科書を参照しながら検討する。

3. 研究目的と研究方法

3.1. 研究目的

本研究の目的は2つある。1つ目は、日本の英語教科書で扱われる異文化の傾向と、学習者の興味や意識の傾向を比較することであり、2つ目は、潜在文化をどのように扱えば異文化理解を促進できるのかを検討することである。よって、以下のリサーチクエスチョンを設定する。

RQ1. 日本の英語教科書の内容や題材が、学習者の興味やニーズに
 応えているものであるかどうか。

RQ2. 日本人英語学習者はどのような異文化意識を有しているのか。

RQ3. 日本の英語教科書には少ないが、フランスの英語教科書で扱われる
 ことの多い潜在文化について、日本人英語学習者は興味があるか
 どうか。また、高等学校で潜在文化を扱うことが発達段階として適切
 かどうか。

本稿でフランスの英語教科書を参照する理由については、CEFRの複言語・複文化主義の実現方法がより具体的なフランスの外国語教育から得られる示唆は、外国とつながる子どもたちが増加する日本の現代社会においても有益であると考えられるからである。以上のリサーチクエスチョンを検討すべく、本調査では、日本人高等学校英語学習者の興味と異文化意識に注目して、2023年に半構造化インタビューを実施した。

3.2. 研究対象と調査方法

本研究では、Yokozeki (2023) が実施したアンケート調査に基づいて、同時期に半構造化インタビューを実施した。Yokozeki (2023) が実施したアンケート調査の回答者は、東京都内にある私立大学附属高校の英語学習者801名で、高校1年生281名、高校2年生294名、高校3年生226名である（巻末資料参照）。調査項目は、英語学習の動機づけについて9項目（質問I-質問III）、どのような活動が好まれるかについて12項目（質問V）であり、それぞれ「1. 強くそう思わない」～「6. 強くそう思う」の6件法であった。加えて、どのよう

な文化に興味があるかについての25項目（質問VI）を、「×. 全く興味がない」～「◎. 非常に興味がある」の4件法で回答してもらった。質問VIで選定された項目は、深沢（1980）、大川（2016）、孫工・江利川（2019）で使用された項目を参照しながら、Yokozeki（2022）の分析結果において日本とフランスに頻出する題材の中から選定した。また、カテゴリーに偏りがないよう、CEFRに記載されている社会文化的知識の7分類すべてが含まれるように選定されている。

Yokozeki（2023）の結果に基づき本研究では、半構造化インタビューを実施した。対象者は同校の1年生9名と2年生27名の合計36名である。回答者全員に研究目的のみのデータ使用と匿名性への配慮を説明した上で、許可を得て録音し、文字起こし後に分析した。

4. 分析

質問I, II, IIIは、英語学習と英語教科書が好きかどうかを測る質問である。アンケート調査は「1. 強くそう思わない」から「6. 強くそう思う」の6件法実施し、結果を平均値の高い順に並べ替えた（表1参照）。「I. 英語を学習するのは好きですか」の平均値は3.73、最頻値がであったが、「II. 英語を身につけることは、あなたにとって重要ですか」の平均値は5.17、最頻値は6と高かった。

表1 質問I, II, IIIの結果（Yokozeki, 2023）

	<i>M (SD)</i>	<i>Median</i>	<i>Mode</i>
I. 英語を学習するのが好き	3.73 (1.33)	4	4
II. 英語を身につけることは重要	5.17 (1.05)	5	6
III. 英語の教科書が好き	3.08 (1.17)	3	3

このアンケート結果をもとにしたインタビュー調査では、英語は好きではないが重要だと思うと回答した学習者に理由を説明してもらった。その結果は以下の通りである。

・親に、英語は重要だからしっかり勉強しなさいと言われたから
(élèves 9, 32)

- ・中学校から英語が苦手だったから好きではないけど、これから先は英語を喋れないと仕事ができないと思うから (élève 27)
- ・日本語と文法が全然違って暗記しなきゃいけないから嫌いだけど、仕事で英語が話せた方がかっこいいし、給料が上がりそうだし、旅行でも絶対使えるから (élève 35)
- ・勉強自体が好きではないけど、将来、色んな選択肢を持つためには英語を身につけなきゃいけないと思うから (élève 11)
- ・テストのために勉強するのは好きじゃないけど、自分の将来のプラスになるって思いながら、能動的に動く英語の学習は身になると思うから (élève 22)

以上から、現代社会において英語を学ぶことは重要であると考え傾向が強く、将来のために英語を身につけたいと道具的に動機づけられている学習者もいることが明らかとなった。

さらに、「III. 英語の教科書は好きですか」については平均値が3.08、最頻値が3という結果が得られた。本研究のインタビューにおいて、好きな理由とそうでない理由について明確に述べた学習者は以下の通りであった。

教科書を好きではない理由 (1, 2, 3)

- ・教科書の文章は短くて、内容が限られてしまっていて面白くないから (élèves 3, 6)
- ・英会話ができるようになりたいのに、教科書の英語は堅苦しくて目標と違うから (élèves 27, 31)
- ・英語を区別するために文法用語を使うのはわかるけど、ちょっと堅く感じるし、文法用語自体は実際に使えないから (élève 28)
- ・中学校の先生が教科書を丸暗記しないと100点を取れないようなテストをして、そういう使い方が嫌いだったから (élève 23)
- ・教科書を使った授業をあんまり楽しいと思ったことなくて。難しい内容が書いてあって、熟語と単語だけ押さえて、意味をとって問題解いてみましょうみたいな使い方が好きじゃないから (élève 33)
- ・自分で読もうと思えば読めるのに、英訳と説明に何時間もかけるから

教科書を好きな理由 (4, 5, 6)

- ・知らない単語や用例が載っているから (élèves 1, 15, 16)
- ・自分の知らない海外のことがいっぱい載っているから (élève 9)
- ・カラフルでわかりやすく、簡潔に書かれているから (élève 22)

内容以前に、教師による教科書の使い方が原因であり好きではないという回答が見られた。内容についても、文章が短いから内容が限られてしまう点や、「話すことのやりとり」の技能が身につけられないことを指摘した学習者も見られた。つまり、教科書が学習者のニーズや興味に応えているとは言えない結果となった。

質問IVでは、英語学習への動機づけを測る質問について6件法で調査し、平均値の高かった順に並べた(表2参照)。最も高い学習動機が、「IV.1 定期テストで良い点数を取りたいから」(平均値:4.41)であった。2位が「IV.4 海外旅行をしたいから」(平均値:4.35)、3位が「IV.5 将来、英語を使って仕事をしたいから」(平均値:4.18)で、どちらも最頻値は6であった。4位が「IV.3 必須科目だから」(平均値:4.41)、5位が「IV.2 より良い大学に入りたいから」(平均値:4.03)、6位が「IV.6 英語圏の文化に興味があるから」(平均値:3.91)であった。

表2 質問IVの結果 (Yokozeki, 2023)

No.		<i>M (SD)</i>	<i>Median</i>	<i>Mode</i>
1	IV.1 定期テストで良い点数を取りたい	4.41 (1.34)	5	5
2	IV.4 海外旅行をしたい	4.35 (1.48)	5	6
3	IV.5 英語を使って仕事をしたい	4.18 (1.53)	4	6
4	IV.3 必須科目だから	4.17 (1.37)	4	5
5	IV.2 より良い大学に入りたい	4.03 (1.41)	4	4
6	IV.6 英語圏の文化に興味があるから	3.91 (1.54)	4	5

インタビューの結果、定期テストに高く動機づけられた学習者の多くは「大学への内部進学のため (n=16)」であると回答した。また、海外旅行に強く動機づけられている学習者は、以下のように海外経験が影響していると回答した(n=13)。

- ・中学の時にタイに行った時に、ご飯はおいしいし人も優しくて、日本と同じ仏教だけど、日本よりも宗教を大切にしている感じが面白くて、大学ではタイ語を勉強したいと思ったから (élève 23)
- ・小学生の時に、チアリーディングの世界大会でフランスのパリに行って、小学生で初めての海外で、英語が全然わからなかったから、それでもう1回行きたいなって思ったから (élève 25)
- ・小学生の時にロンドンとベルギーに行ったら、全部が新しく全然違うなって思って、話に聞くだけじゃなくて自分の目で見て、色んなところで海外と関わって、仕事とか旅行もしたいなって思ったから (élève 26)
- ・ニュージーランドに短期留学に行って、現地のラグビープログラムに入って、そこで英語が好きになって、前はテスト60点とかだったのが、帰ってきて90点連発になったから (élève 36)

また、「IV.6 英語圏の文化に興味があるから」については、本研究のインタビュー調査では、以下のように興味が低い理由と高い理由を語っている。

興味が低い理由 (1, 2, 3)

- ・日本で医者になりたいから、海外の文化にはそんなに興味がないから (élève 18)
- ・海外は怖いイメージがあるから (élèves 20, 27)
- ・英語圏よりもアジア圏の文化の方が好きだから (élève 23, 35)

興味が高い理由 (4, 5, 6)

- ・バンドをやっていて、アメリカとイギリスの違いから来る音楽性の違いが面白いと思ったことがあるから (élève 10)
- ・好きなアニメをSNSに上げると英語でリアクションが来ることが多くて、同じものが好きなのも文化の共通点なのかなって思うから (élève 22)
- ・ジョークが好きだけど、文化や歴史がわからないと笑えないから (élève 28)
- ・海外は日本よりももっと多様性が認められているようなイメージがあって、その背景とかも含めて知りたいなって思うから (élève 31)

- ・世界史を勉強していて、イギリスやアメリカが強国でいられたのは、文化や教育を大切にしていたからなのかなって思ったのが興味を持ったきっかけだった (élève 2)

興味が低い理由からは、一部の学習者には海外に対するステレオタイプがあることが明らかとなった。また、英語圏以外の国に興味があるからという理由で低めの点数をつけた回答者も見られた (n=3)。興味が高い理由からは、学習者自身の経験や他教科での学び、SNSをきっかけに異文化に興味を持った者もいることが示された。また、顕在文化に留まらず、日本とは異なる価値観となった背景や歴史等についても深く学びたいと言及する学習者もいた。

質問Vは、どのような活動が好きかについての質問を6件法で調査し、平均値の高かった順に並べた (表3参照)。最も高かったのは「V.5 英語で音楽を聞く」(平均値：4.88) で最頻値も6と最も高かった。2位が「V.11 メールやLINEの書き方を学ぶ」(平均値：4.02)、3位が「V.7 英語でロールプレイや会話をする」(平均値：3.84) であった。表3の下線は異文化を扱った活動項目を示し、1位、4位、5位、9位、11位の順に興味が高いという結果が得られた。

表3 質問Vの結果 (Yokozeki, 2023)

No.		<i>M (SD)</i>	<i>Median</i>	<i>Mode</i>
1	V.5 英語で音楽を聞く	4.88 (1.25)	5	6
2	V.11 メールやLINEの書き方を学ぶ	4.02 (1.44)	4	4
3	V.7 英語でロールプレイや会話をする	3.84 (1.54)	4	4
4	V.3 <u>文学やニュースを読む</u>	3.80 (1.45)	4	4
5	V.8 英語話者の <u>価値観や考え方</u> を学ぶ	3.79 (1.45)	4	4
6	V.9 英語で自分の意見を書く	3.73 (1.35)	4	4
7	V.4 音声を聞いて問題を解く	3.70 (1.42)	4	4
8	V.1 文法や語彙を詳しく学ぶ	3.58 (1.39)	4	4
9	V.12 <u>差別や移民問題</u> を英語で議論する	3.23 (1.41)	3	3
10	V.6 英語で発表する	3.20 (1.53)	3	3
11	V.10 英語で <u>物語や脚本</u> を書く	3.03 (1.33)	3	3
12	V.2 入試対策の長文を読む	3.01 (1.40)	3	3

*下線は異文化を扱った項目を示している。

質問Vの上位5項目に対する興味が高い理由についてインタビューしたとこ

ろ、回答は以下の通りであった。回答の中には、現代社会における英語の必要性を感じているものや、言語自体を学ぶだけでは不十分であることを説明した回答も見られた。

質問Vの上位5項目に対する興味が高い理由 (4, 5, 6)

V.5 英語で音楽を聞く

- ・本来の英語が学べるから (élève 24)
- ・洋楽を聞いて英語を聞き取れたり、意味が分かると嬉しいから (élève 2)
- ・英語の先生が音楽を聞かせてくれたから (élèves 4, 11)

V.11 メールやLINEの書き方を学ぶ

- ・交換留学生と英語でチャットするから (élèves 25, 33)
- ・ビジネスで使える英語を知りたいから (élève 23)
- ・SNS上でのコメントやチャットで自然な英語を使いたいから
(élèves 22, 26, 34)
- ・中学で手紙の書き方を習ったけど、メールとかに変えてほしかったし、この間もネイティブの先生に英語でメールを書く時に困ったから
(élève 8)

V.7 英語でロールプレイや会話をする

- ・コミュニケーションを取るのが好きだから (élève 30)
- ・英会話ができることは今後に直接役に立つと思うから (élèves 12, 29)
- ・英語で話すのは好きだけど、うまく話せないから練習したい
(élèves 1, 16, 23, 31)
- ・即興で特定のお題について話すのは、難しいけど面白いと思うから
(élève 28)

V.3 文学やニュースを読む

- ・海外のニュースを見て、自分で理解できた瞬間が嬉しいから (élève 9)
- ・海外と日本のニュースを見比べて、同じニュースでも伝え方が違うことを学んでみたいから (élève 5, 28)
- ・Spotifyで英語ニュースを聞いたり、英字新聞を読むようにしていて、TikTokで流れてくる海外ニュースでもその国のことを知れたりするから (élève 34)

V.8 英語話者の価値観や考え方を学ぶ

- ・日本人の控えめな思想のまま海外に行っても、ちゃんと相手の慣習を理解できていないから、言語ができたとしてもうまく使えないと思うから (élève 2)
- ・同じ人間で同じ気持ちでも、話す言葉が違ふと感じ方も違ふと思うから (élève 22)
- ・教科書の英語と、実際の英語の使い方が違ふことを短期留学やYouTubeで感じて、外国人の考え方を学ぶことは英語自体を学ぶことにも繋がると思うから (élève 29)
- ・大統領演説って候補者の思想が出るので、そういうのを使いながら勉強するのは今の大統領でもできるし、昔の大統領演説に遡れば当時の時代感とかもわかるので面白いから (élève 16)

1位の「V.5 英語で音楽を聞く」は、過去の授業で扱われて楽しかったというポジティブな学習経験によるものであることが明らかになった。現代社会における英語の必要性を感じている回答については、2位の「V.11 メールやLINEの書き方を学ぶ」と3位の「V.7 英語でロールプレイや会話をする」に現われている。「V.11 メールやLINEの書き方を学ぶ」は「書くことのやり取り」という技能であり、学習者たちは、ビジネスシーンでのメールやインターネット上でやり取りを想定し、現代の情報社会を生きるためのニーズが示された。また、「V.7 英語でロールプレイや会話をする」は「話すことのやり取り」という技能であり、コミュニケーションツールとしての英語を身につけることに興味を持ち、授業内で英会話の練習をしたいと回答する学習者が見られた。さらに、言語だけではなく異文化も学ぶ必要があると感じている傾向が、4位の「V.3 文学やニュースを読む」と5位の「V.8 英語話者の価値観や考え方を学ぶ」に現われている。「V.3 文学やニュースを読む」に高い点数をつけた学習者は、同じニュースでも国によって伝え方が異なることについて学びたいと答えた。また、「V.8 英語話者の価値観や考え方を学ぶ」に興味のある学習者は、日本人と外国人の価値観や思想の違いや、言語ごとの感情表現の差について言及していた。つまり、英語教科書で扱われる文化に関する活動は顕在文化に関するものが大部分を占めているが、潜在文化についても扱ってほしいという声もあ

ることが明らかとなった。

質問VIは、どのような文化的側面への興味が高いのか、「×. 全く興味がない」から「◎. 非常に興味がある」の4件法で実施し、その結果を平均値の高かった順に並べた（表4参照）。表4の左から2列目は、Yokozeki（2022）の調査に基づき、日本の教科書に高い割合で含まれていた題材に「日」、フランスの教科書に高い割合で含まれていた題材に「仏」、両方の教科書に高い割合で含まれていた題材を「日仏」と示している。先行研究において、日本の英語教科書は顕在文化が中心であることが指摘されてきたが（e.g., 大川, 2016; 深沢, 1980; 孫工&江利川, 2019）、本調査では、学習者の興味も顕在文化に集中することが確認された。具体的には、音楽（平均値：3.44）、映画（平均値：3.42）、旅行（平均値：3.34）、食べ物（平均値：3.23）、日常生活（平均値：3.23）といった身近な顕在文化が上位を占めている。1位の音楽と2位の映画は、フランスの教科書で多く扱われる題材であるが、日本人英語学習者の興味も高いことが示された。潜在文化に対する興味に着目すると、「対人関係」に属する題材である「VI.10 差別問題」（平均値：2.69）や「VI.11 ジェンダー問題」（平均値：2.62）が16位と17位であった。これは、日本の教科書に多い「VI.14 科学技術」、「VI.7 SDGs」、「VI.13 伝記」「VI.8 エネルギー問題」を抑えた結果であった。

表4 質問VIの結果（Yokozeki, 2023）

No.			<i>M (SD)</i>	<i>Median</i>	<i>Mode</i>
1	仏	VI.18 音楽	3.44 (0.72)	4	4
2	仏	VI.19 映画	3.42 (0.72)	4	4
3	日仏	VI.5 旅行	3.34 (0.75)	3	4
4	日仏	VI.2 食べ物	3.23 (0.73)	3	3
5	日仏	VI.1 日常生活	3.23 (0.75)	3	3
6	日仏	VI.23 ファッション	3.00 (0.89)	3	3
7	仏	VI.25 ゲーム	2.99 (0.93)	3	3
8	日仏	VI.4 スポーツ	2.96 (0.89)	3	3
9	仏	VI.20 本	2.94 (0.83)	3	3
10	日仏	VI.22 発音・アクセント	2.87 (0.89)	3	3
11	日	VI.3 動物	2.86 (0.80)	3	3
12	日仏	VI.24 祭り	2.83 (0.84)	3	3

13	日	VI.9	戦争と平和	2.74 (0.89)	3	3
14	日仏	VI.17	芸術	2.70 (0.92)	3	3
15	日仏	VI.16	世界遺産	2.70 (0.91)	3	3
16	仏	VI.10	差別問題	2.69 (0.87)	3	3
17	仏	VI.11	ジェンダー	2.62 (0.91)	3	3
18	日仏	VI.21	ジェスチャー	2.57 (0.87)	3	3
19	日仏	VI.6	環境問題	2.46 (0.89)	2	3
20	日仏	VI.15	歴史・歴史の人物	2.44 (0.94)	2	2
21	日	VI.14	科学技術	2.39 (0.95)	2	2
22	仏	VI.12	移民問題	2.34 (0.86)	2	2
23	日	VI.7	SDGs	2.34 (0.89)	2	2
24	日	VI.13	伝記	2.34 (0.93)	2	2
25	日	VI.8	エネルギー問題	2.28 (0.87)	2	2

特に、日本には少ないがフランスには多い「VI.18 音楽」「VI.19 映画」「VI.25 ゲーム」「VI.20 本」「VI.10 差別問題」「VI.11 ジェンダー」「VI.12 移民問題」について取り上げると、興味がある理由は以下の通りであった。

興味がある理由 (○, ◎)

VI.18 音楽

- ・音楽なら堅苦しくないから (élève 18)
- ・独特の表現や、単語と単語を自然に繋げる言い方を知れるから
(élèves 9, 11)

VI.19 映画

- ・映画を英語で見られるようになりたいと思うから (élève 21)
- ・映画を見てセリフを書き取る活動を授業でやって、それが面白かったから (élève 34)
- ・映画はその国の価値観や時代を知る良い手段だと思うから (élève 2)

VI.25 ゲーム

- ・ゲームはよくやるし楽しいから (élèves 9, 4, 20, 22, 31)
- ・海外の人とボイスチャットで英語を話すのがすごく面白いから (élève 34)
- ・ゲームだからこそできる交流があると思っていて、日本のゲームは海外で人気だから話題にできるし、日本から海外のサーバーに飛び込もうと

思えば飛び込めるし、今の時代は世界中の人とボイスチャットを使った交流が多いから (élève 29)

- ・海外のうまい人のゲーム実況を英語で聞きとりたから (élève 16)

VI.20 本

- ・英語でマンガを読んだら面白かったから (élève 22)
- ・電車で英語の本をよく読むし、授業で本のプレゼンをやったから (élève 15)
- ・英語で書かれた本や論文を読むことで、日本語のものにはない視点が得られて重要だと思うから (élèves 5, 16)

VI.10 差別問題

- ・自分自身が日本人じゃなくて、「なんで外国人なのに日本にいるんだよ」とか差別的なことを言われたことがあるから (élève 2)
- ・留学中に、就寝時間過ぎて寝なきゃいけないのにうるさくしてホテルの人に怒られた時に、僕がいた日本人グループには「ごめんね、君たちは悪くない」って言われて。日本人は真面目だから就寝後に喋るなんてしないだろうって逆差別みたいな偏見を経験して、そこで興味を持ったから (élève 36)
- ・アメリカ留学に行っている友達が「レイシストしかいない」って言って、かわいそうだな、意外と差別があるんだなって思ったから (élève 23)
- ・授業ではいつも同じ結論でワンパターンだから、こういう考えの人もいますよ、この立場で考えてみてくださいって手助けがある状態で学んでみたいから (élève 28)

VI.11 ジェンダー

- ・性別がどちらでもない友達がいるから (élève 34)
- ・海外でジェンダーについて話すことがあるかもしれないから、勉強しておきたいなって思ったから (élève 22)
- ・例えば、レディーファーストって男性に対する差別にもなっているって、海外の人がどう思っているのかを知りたいから (élève 7)
- ・日本だとジェンダーレスって言いながら同性婚を認めてないし、色んな人が男女差別どうこうって騒いで、お互いストレスなだけなのに何の意味があるんだろう、なんで解決しないのかなって思っているから (élève 4)

VI.12 移民問題

- ・社会科が好きで、勉強して興味を持ったから (élèves 16, 21, 28, 29)
- ・大学が高校生向けに開講している講座で移民問題を知って、そこで興味を持ったから (élève 24)
- ・ハンガリーに行った時にシリアからの移民を見て酷いと思って。なんで同じ人間なのに、日本では人権が守られていて、内戦だらけの国だとそうじゃないんだろうって考えて、見て見ぬふりは良くないんじゃないかなと思ったから (élève 2)
- ・色々な人種の人が住んでいる地域の話の聞くと、外国人同士の中で価値観や考え方の違いで軋轢が生まれていて、さらにその外国人っていう枠組みに対して、日本人が排他的に思っていることにも気付いて、国際交流を日本語だけでなく英語とかでもやるべきなんじゃないかなとか思ったから (élève 5)

「VI.18 音楽」「VI.19 映画」「VI.20 本」への興味が高かった理由については、これらの題材を通して発音や潜在文化を学んだ経験が影響していると回答していた。特に潜在文化については、「映画は、その国の価値観や時代を知る良い手段だと思うから (élève 2)」、「英語で書かれた本や論文を読むことで、日本語のものにはない視点が得られて重要だと思うから (élèves 5, 16)」という回答から、映画や本を通して潜在文化について学んだ経験が影響していることがわかる。「VI.25 ゲーム」については、ボイスチャットしながらプレイをする趣味や、実況動画を英語で見る習慣といった身近な経験が影響を与えていると分析できる。また、ボイスチャットを使ってゲームをすることは、質問Vの3位であった「V.7 英語でロールプレイや会話をする」というニーズとの関連があると考えられる。さらに、大川 (2015) や孫工・江利川 (2019) では少ないと指摘されている「VI.10 差別問題」「VI.11 ジェンダー」「VI.12 移民問題」が中位であった理由については、社会科等の他教科で学んだから、あるいは、学習者自身の経験や周囲の話から影響を受けたという趣旨の回答が多かった。つまり、他教科や海外経験、あるいは他者との関わりの中で潜在文化に触れて、身近に感じたことが興味に繋がっていることを示している。

以上をまとめると、「VI.18 音楽」「VI.19 映画」「VI.20 本」「VI.25 ゲーム」

「VI.10 差別問題」「VI.11 ジェンダー」「VI.12 移民問題」は、日本の英語科教科書の中で取り上げられることは少ないが、興味がある高校生英語学習者も一定数いることが明らかとなった。その背景には、顕在文化を通して潜在文化を学んだり身近に感じたりした経験や、英語による「話すことのやり取り」へのニーズも垣間見られた。

5. 考察

RQ1. 日本の英語教科書の内容や題材が、学習者の興味やニーズに合っているものであるかどうか。

質問I～IIIにおいて、現代社会において英語を学ぶ重要性は強く感じているものの、英語教科書は、大きく言語的技能、内容、異文化に関する題材の3点においてあまり好きではないという傾向が示された。まず内容については、身につけたい技能として「話すことのやりとり」を挙げた回答も多かったが、文法シラバス中心の教科書を通してでは身につけられないことを指摘した学習者もいた。また、教科書の内容についても、「教科書の文章は短くて、内容が限られてしまっていて面白くないから (élèves 3, 6)」、「自分で読もうと思えば読めるのに、英訳と説明に何時間もかけるから (élève 36)」といった回答が示すように、教科書の文章量による内容の少なさや、授業内での扱い方を指摘した学習者も見られた。さらに、異文化に関する題材については、Yokozeki (2022) において日本の教科書には少ないと指摘されている「VI.18 音楽」「VI.19 映画」「VI.20 本」「VI.25 ゲーム」といった顕在文化に対する興味が低いことも明らかとなった。言い換えると、日本の英語教科書の内容や題材が、学習者の興味やニーズに合っているものであるとは言い難いことが明らかとなった。

RQ2. 日本人英語学習者はどのような異文化意識を有しているのか。

異文化に関する内容や題材については、アンケート結果では「IV.6 英語圏の文化に興味があるから」という統合的動機付けは最も低かった。しかし、この項目に対して高い点数をつけた学習者にインタビューしたところ、学習者自身の経験や他教科での学び、SNSをきっかけに異文化に興味を持ったからとい

う回答が得られた。つまり、異文化について深く考察する学習者もいることが明らかとなった。

East et al. (2022) やLiddicoat (2008) が指摘するように、英語の文法と語彙だけを学んだ学習者は、英語でコミュニケーションするための十分な能力を備えているとは言えないと理解している学習者も観察された。例えば、「V.8 英語話者の価値観や考え方を学ぶ」での回答では、「日本人の控えめな思想のまま海外に行っても、ちゃんと相手の慣習を理解できていないから、言語ができたとしてもうまく使えないと思うから (élève 2)」、「外国人の考え方を学ぶことは英語自体を学ぶことにも繋がると思うから (élève 29)」といった発言があった。つまり、学習者の中には、教科書で文法や語彙を学ぶだけではコミュニケーション能力を得たことにはならないと感じている者もいることが示された。

本調査のインタビュー回答者が、Baker (2011) の「異文化意識モデル」においてどの段階にあるのかというアプローチで分析すると、レベル1「基本的文化意識」とレベル2「発展的文化意識」を持つ学習者がいることが明らかになった。まず、Baker (2011) のレベル1「基本的文化意識」を持つ学習者について考察する。「V.3 文学やニュースを読む」において、「海外と日本のニュースで、同じニュースでも伝え方が違うことを学んでみたいから (élève 5, 28)」と答えた学習者は、国によって異なる意見や解釈の違いがあることを理解している。つまり、「基本的文化意識」の中でも、「4. 他者の、文化によるその人の態度・価値観・信念への意識と、自文化による態度・価値観・信念とを比較する能力」を持っていると解釈できる。次に、レベル2である「発展的文化意識」の有無について考察する。「V.8 英語話者の価値観や考え方を学ぶ」において、「大統領演説って候補者の思想が出るので、そういうのを使いながら勉強するのは今の大統領でもできるし、昔の大統領演説に遡れば当時の時代感とかもわかるので面白いから (élève 16)」と答えた学習者は、その国の中でも、どの政治家を支持するかによって思想が異なることを理解していると言える。また、「VI.11 ジェンダー」において、「日本だとジェンダーレスって言いながら同性婚を認めてないし、色んな人が男女差別どうこうって騒いで、お互いストレスなだけなのに何の意味があるんだろう、なんで解決しないのかなって思っているから (élève 4)」と疑問を示した学習者も、ジェンダー問題に関

して日本国内で様々な意見を持つ人同士の対立について考えている。つまりこの2人の学習者には、「発展的文化意識」でも「7. どのような文化的集団の中にも複数の意見や視点があるという意識」があると考察できる。他にも、「VI.12 移民問題」に高い興味を示す学習者が、「色んな人種の人が住んでいる地域の話を知ると、外国人同士の中で価値観や考え方の違いで軋轢が生まれていて、さらにその外国人っていう枠組みに対して、日本人が排他的に思っていることにも気付いて、国際交流を日本語だけでなく英語とかでもやるべきなんじゃないかなとか思ったから (élève 5)」と回答していることから、外国人同士、あるいは外国人と日本人の価値観の違いが原因の対立について客観的に分析しているとわかる。つまり、「発展的文化意識」の中の「9. 特定の文化間における共通基盤への意識と、特定の文化間における食い違いや誤解がある可能性への意識」があるのではないだろうか。以上から、レベル1「基本的文化意識」とレベル2「発展的文化意識」を持つ学習者もいることが明らかになった。しかし同時に、レベル3「異文化意識」を持つと解釈できる回答をした学習者はいなかったことも示唆された。

RQ3. 日本の英語教科書には少ないが、フランスの英語教科書で扱われることの多い潜在文化について、日本人英語学習者は興味があるかどうか。

また、高等学校で潜在文化を扱うことが発達段階として適切かどうか。

全体的に顕在文化への興味が高く、潜在文化は興味が低いという結果が得られ、深沢（1980）が実施した研究結果と類似していた。しかしインタビューにおいては、潜在文化について学びたいと思う学習者もいることが明らかとなり、発達段階としては日本人高校生に潜在文化を導入することは可能ではないかと考えられる。

まず、フランスの英語教科書に多い顕在文化に関する題材について、日本人英語学習者は興味があるかどうかについて検討する。アンケートとインタビュー結果から、フランスの教科書に多い「VI.18 音楽」「VI.19 映画」「VI.20 本」「VI.25 ゲーム」は、日本人英語学習者にも好まれる傾向が明らかとなった。その理由についてインタビューでは、「VI.18 音楽」「VI.19 映画」「VI.20 本」を通して英語や異文化を学んだ経験について述べている。また、「VI.25 ゲーム」をボイスチャットで話しながらプレイする「話すことのやり取り」へ

のニーズ、実況動画を英語で見る習慣が影響していると回答した学習者もいた。無料動画配信サービスやサブスクリプションの普及により、気軽に映画や音楽、本に触れられるようになったこと、インターネットやSNSを使って世界中の人々とコミュニケーションをとったり情報を簡単に入手できるようになったことが影響している可能性がある。

次に、高等学校で潜在文化を扱うことが発達段階として適切かどうかを検討する。特徴的だったアンケート結果については、「VI.10 差別問題」「VI.11 ジェンダー」「VI.12 移民問題」といったフランスの教科書に多い潜在文化についての記述が、日本の教科書に多い「VI.7 SDGs」「VI.13 伝記」「VI.8 エネルギー問題」を押さえて中位を占めていた点である。この結果について本研究のインタビューでは、学習者自身や周囲で差別を経験した人がいるためという回答や、社会科等の他教科で学んで興味を持ったからという回答が得られた。つまり、潜在文化を身近に感じる機会があれば興味を持てるということであるため、発達段階としては、高等学校英語学習者に対して潜在文化を示すことは可能であることを示唆している。「VI.10 差別問題」において、「授業ではいつも同じ結論でワンパターンだから、こういう考えの人もいますよ、この立場で考えてみてくださいって手助けがある状態で学んでみたいから (élève 28)」という回答があったように、教師の問いかけや教材による適切な足場かけを行えば、より深い異文化理解を促進できるのではないだろうか。

6. まとめ

本研究では、Yokozeki (2023) で実施したアンケートに即した半構造化インタビューにより、日本人英語学習者の異文化意識を量的にも質的にも調査した。本研究目的の1つ目である、日本の英語教科書での異文化についての記述の傾向と、学習者の興味・関心や意識の傾向を比較について検討すると、日本の英語教科書では顕在文化が多く扱われ、学習者も顕在文化に高い興味を持つ傾向が示された。しかし、グローバル化が進む現代社会において必要なコミュニケーション能力を身につけるには、異文化意識を向上させる必要がある。ここで2つ目の研究目的である、潜在文化をどのように扱えば異文化理解を促進できるのかを検討すると、2つの方法を考えることができる。

1つ目は、異文化意識の高い学習者とそうでない学習者との間での「やりとり」による異文化理解促進である。アンケートの質問Vで2位であった「V.11 メールやLINEの書き方を学ぶ」と、3位の「V.7 英語でロールプレイや会話をする」は、「やりとり」に対する興味やニーズの高さを示している。この結果を反映して、クラスメイト同士が持つ異なる解釈や経験についてやりとりする機会を与えれば、学習者のニーズに応えると同時に、複雑な題材を身近に感じさせることが可能であると考えられる。また、RQ2でも検討した通り、「基本的文化意識」と「発展的文化意識」を持つ学習者がいる中で、差別やジェンダー、移民問題について扱うと、クラスメイト内で異文化に対する理解や解釈の差が生まれると予想される。そこで、他者と自分との間で異なる解釈や反対意見があることを学び合うことができれば、「発展的文化意識」の「6. 異文化理解は暫定的なものであるという意識と、修正可能である状態」や「7. どのような文化的集団の中にも複数の意見や視点があるという意識」につなげることができないのではないだろうか。

2つ目の方法として、RQ3での考察を反映すると、学習者の興味の高い「音楽」「映画」「本」「ゲーム」等の顕在文化を通して、「差別問題」「ジェンダー」「移民問題」等の潜在文化を学ばせることが考えられる。アンケートとインタビューの結果から、学習者たちは音楽や映画、ゲームへの興味が高いことが明らかとなった。これらを文化的教材として授業に取り込んで社会問題に繋げることができれば、顕在文化を通して潜在文化を知ることができ、異文化意識向上に寄与するのではないだろうか。

本研究には課題も残されている。今回のインタビューでは、差別やジェンダーといった複雑な問題について深く考える学習者がいることが示されたが、東京都以外の地方の高校生も同じレベルの異文化意識を持っているかどうかまでは明らかにできていない。また、本研究では英語科に注目したが、国語科や社会科では異文化がどのように取り上げられているのかについても検討できるだろう。最後に、調査結果をもとに異文化理解を促進するような文化の取り上げ方について検討したが、具体性に欠けているため、より具体的で実践的な研究が必要である。

上記のような課題は残されているが、本稿では、日本人高校生の異文化意識を検討することにより、日本人高校生の中には潜在文化について学びたいと思

う者もいることが明らかにし、発達段階を検討しても異文化を導入可能であることを示すことができた。学習者の「やりとり」へのニーズや、興味が高い顕在文化を使って潜在文化を学ばせる方法により、今後は、Baker (2011) のレベル3である「異文化意識」にまで高めることができる教材についても検討できるのではないだろうか。

参考文献

- Baker, W. (2011). Intercultural awareness: modelling an understanding of cultures in intercultural communication through English as a lingua franca. *Language and Intercultural Communication*, 11 (3).
- Baker, W. (2020). English as a lingua franca and transcultural communication: rethinking competences and pedagogy for ELT. In Hall, C. J. & Wicaksono R (Eds), *Ontologies of English: conceptualising the language for learning, teaching and assessment*. Cambridge University Press.
- Baker, W., & Ishikawa, T. (2021). *Transcultural communication through global Englishes*. Routledge. Complexity. Multilingual Matters.
- Byram, M. Teaching and assessing intercultural communicative competence. *Multilingual Matters LTD*, 1997.
- Canale, M. (1983). From communicative competence to communicative language pedagogy. In J. C. Richards & R. W. Schmidt (Eds.), *Language and Communication*. Longman.
- Canale, M. & Swain, M. (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics*, 1, 1-47.
- Celce-Murcia, M., Dörnyei, Z., and Thurrell, S. (1995). Communicative competence: A pedagogically motivated model with content specifications, *Issues in Applied linguistics*, 6.2, 5-35.
- Council of Europe. (2020). Common European Framework of Reference for Languages –Companion Volume.
- East, M., Tolosa, C., Howard, J., Bierbricher, C., & Scott, A. (2022). *Journeys towards intercultural capability in language classrooms: voices from students, teachers and researchers*. Springer.
- Halliday, A. (2011). Intercultural communication ideology, Sage.

- Hymes, D. (1972). On Communicative Competence. In J. B. Pride, & A. Holmes (Eds.), *Sociolinguistics: Selected Readings*. Harmondsworth: Penguin.
- Liddioat, A. (2008). Pedagogical practice for integrating the intercultural in language teaching and learning. *Japanese Studies*, 28 (3).
- Meierkord, C. (2002). 'Language stripped bare' or 'linguistic masala'? Culture in lingua franca communication. In K. Knapp & C. Meierkord (Eds.), *Lingua franca communication*, 109-134.
- Ministère de l'Education Nationale et de la Jeunesse. (2015). *Bulletin officiel spécial no.11 du 26 novembre 2015*.
- Ministère de l'Education Nationale et de la Jeunesse. (2019a). *Bulletin officiel spécial no.1 du 22 janvier 2019, Annexe 1 Programme de langues vivantes de seconde générale et technologique, enseignements commun et optionnel*.
- Ministère de l'Education Nationale et de la Jeunesse. (2019b). *Bulletin officiel spécial no.1 du 22 janvier 2019, Annexe 2 Programme de langues vivantes de première et terminale générales et technologiques, enseignements commun et optionnel*.
- Yokozeki, M. (2022). A comparative study of high school English textbooks in Japan and France. *Thought Currents in English Literature*, 95, 125-140.
- Yokozeki, M. (2023). Gauging High School Students Predisposition towards Developing Intercultural Awareness. *Thought Currents in English Literature*, 96, 173-190.
- 大川光基. (2016). 高等学校英語検定教科書が扱う文化題材の考察 ―異文化理解の観点から―. *The Language Teacher*, 40 (1), 1-8.
- 栗原優. (2006). 理想の外国語（英語）教育を目指して ―異文化教育の盲点―. *文化情報学*, 13 (2), 21-28.
- 甲斐順. (2021). 高等学校「英語表現I」教科書における文法練習問題の写真及びイラストの分析. *言語表現研究* (兵庫教育大学言語表現学会), 37, 43-54.
- 木村松雄&高木亜希子. (2020). 4-4-4一貫性英語教育に資する青山学院Can-doリストの開発 ―CEFRとの対応を視野に入れて―. *青山スタンダード論集*, 15, 121-143.
- 高木亜希子&木村松雄. (2020). 英語教育における異文化間能力育成の重要性 ―青山学院異文化間能力指標の検討からの示唆―. *青山スタンダード論集*, 15, 145-171.
- 中井弘一. (2016). 高等学校「英語表現」の授業に求めたい活動. *大阪女学院大学教職課程機関誌OJC教職活動報告・研究*, 4, 156-165.
- 深沢清治. (1980). 文化的題材と学習者の興味に関する一考察. *中国地区英語教育学会研究紀要*, 10, 11-15.

孫工季也&江利川春雄. (2019). 高校英語教科書における社会問題を批判的に考える力の扱われ方 —「英語表現 I」用教科書の設問題材分析を通じて—, *和歌山大学教育学部紀要人文科学*, 69, 51-56.

文部科学省. (2018). 高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 平成30年7月 外国語編英語編.

巻末資料 学習者の異文化への興味に関する質問紙調査 (Yokozeki, 2023)

I. 英語を学習するのは好きですか。

強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う

II. 英語を身につけることは、あなたにとって重要ですか。

強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う

III. 英語の教科書は好きですか。

強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う

IV. あなたはなぜ英語を勉強していますか。

1. 定期テストで良い点数を取りたいから

強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う

2. より良い大学に入りたいから

強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う

3. 必須科目だから

強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う

4. 海外旅行したいから

強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う

5. 将来、英語を使って仕事をしたいから

強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う

6. 英語圏の文化に興味があるから

強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う

V. どのように英語を学習するのが好きですか。

1. 文法や語彙を詳しく学ぶ

- 強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う
2. 入試対策の長文を読む
- 強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う
3. 文学やニュースを英語で読む
- 強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う
4. 音声を聞いて問題を解く
- 強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う
5. 英語の音楽を聞く
- 強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う
6. 英語で発表する
- 強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う
7. 英語でロールプレイや会話をする
- 強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う
8. 英語話者の価値観や考え方を学ぶ
- 強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う
9. 英語で自分の意見を書く
- 強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う
10. 英語で物語や脚本を書く
- 強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う
11. 英語でのメールやLINEの書き方を学ぶ
- 強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う
12. 差別や移民問題を英語で議論する
- 強くそう思わない 1——2——3——4——5——6 強くそう思う

VI. 英語学習において、以下の題材に興味がありますか。◎○△×で答えてください。

◎：非常に興味がある ○：興味がある △：あまり興味がない

×：全く興味がない

1. () 日常生活

13. () 伝記

2. () 食べ物

14. () 科学技術

- | | |
|----------------------------|-------------------------|
| 3. () 動物 | 15. () 歴史・歴史的人物 |
| 4. () スポーツ | 16. () 世界遺産 |
| 5. () 旅行 | 17. () 美術・芸術 |
| 6. () 環境問題 | 18. () 音楽 |
| 7. () 持続可能な開発目標
(SDGs) | 19. () 映画 |
| 8. () エネルギー問題 | 20. () 本 |
| 9. () 戦争・平和 | 21. () ジェスチャー |
| 10. () 差別 | 22. () 発音・アクセント |
| 11. () ジェンダー | 23. () 服装・ファッション |
| 12. () 移民 | 24. () 祭り |
| | 25. () ゲーム (RPG, etc.) |